
-DAYS-

中川もえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- DAYS -

【Nコード】

N4084C

【作者名】

中川もえ

【あらすじ】

ある日突然余命一年を宣告された康は別の病室で自分の彼女の姿を見かける。

第一話： MY LAST LIFE

12月18日・くもり

明日はリナの誕生日だ。もう、18歳になるんだね。でも、俺の中では2人はあの頃のまま、何も変わっちゃいないよ。17歳のまま、時は止まってるんだ。今でも目をつむるとあの頃の景色が鮮明に浮かんでくるんだ。

一年は長いようで短かった。

一年の中でいろんな事がありすぎでとても短く感じたよ。それでも、時は確実にすぎていくものなんだね。

リナにはね、話したいことがたくさんあるんだ。ねえ、リナ。こっちをむいて俺の話を最後まで聞いて。でも、なんか眠たくなってきたな。最近疲れててあんまり寝てなかった気がする。だから、俺が起きたら話してやるよ。ちゃんと起こせよ？

おやすみ、リナ。

first title: my last life
- days -

12月7日・晴れ

一年前

「あと1年と行ったところですかね。」

「え?」

思いもよらない医師の発言に目を丸くする結人。顔がどんどん青ざめいく。

「若いということ、癌の進行が早かったのです。もう少し早ければ、手術次第で助かったかもしれませんが、彼の場合全身に癌が転移してしまっています。」

淡々と話す医師に、結人はあまりにも突然すぎて、頭がついていけなかった。言葉の出ない結人に、隣に座っていた少年が口を開いた。

「・・・俺行くわ。」

「ちよっ・・・康!どこ行くんだ!!」

冷めた声で結人に言い捨てた少年は、結人の子供の康であった。康は医師に目を向けおじぎすると、静かにその場を去った。病院の廊下には康の足音だけが響いていた。

康のいなくなった診察室はすっかり静まりかえってしまった。鳥の鳴き声が結人の耳をすり抜けていく。いつも聞き入ってしまうようなその鳴き声も今の結人には聞こえなかった。

「あなたはまだお若いですから、こんな経験されたこともないでしょう。動揺してしまうのもわかります。」

そう医師が言うと結人は口をようやく開いた。

「いえ……。僕の妻も癌で短い生涯を終えました。あいつが生まれてすぐに……。」

「そうでしたか……。」

「……皮肉なもんですよね。息子も同じ人生を歩むだなんて。」

結人の手は汗でびっしょりだった。しかし、結人の握りしめている手にはいつそう力が入る。何かを掴んでいないと結人の精神が暴れてしまいそうだったからだ。

「妻の時は、体が悪いことはわかっていたので命が短いこともなんとなくわかって、ものすごくつらかったけど、それなりに受け止めることはできました。だけど……康は……あいつは、昨日もその前だっていつもと変わらず元気だったのに……。残りの一年……どうしてやったらいいか……。短すぎて……。」

そこまで言うとは結人の固く握りしめていた手に涙がこぼれおちた。太陽も傾きはじめ、オレンジ色の光が窓ガラスから射しこんでいる。その光が結人にはスポットライトのように当たるのだから虚しさを余計に引き立たせた。必死に涙をこらえようとする結人に医師は優しく手を差し伸べた。

「長瀬さん。今の医療技術なら、病気の進行をわずかながらも遅らせることができます。ですが、本人はとても苦しい思いをなさるでしょう。もし、あなたが少しでも長く生きてほしいと願うのなら我々も全力の手を尽くします。しかし、息子さんの幸せを望むのなら手術を受けず、薬だけの治療になりますが、ご家庭で静かに過ごされるのが精神的にもいいのではないかと思います。こうした治療もあるんですよ。」

顔を下に向けていた結人はゆっくりと顔をあげた。

第二話：MY LOVER RINA

- days -
: my lover rina

今、俺が歩いている道はいつもの道だ。だけど、昨日とは全く違うような気がする。気持ちが一とつでこんなにも変わるものなんだ。この道も進んで行けばいつかは終わる。人より少し短い人生だけど・・・リナ。俺はお前を置いていきたくないよ。死ぬのなんか全然怖くないと思っていたのに・・・

12月14日・晴れ

あれから一週間。時は何事もなく過ぎていく。

「ねえ、リナ今日も休み？」

リナのいない事に気付いた康は、隣の席に座っているあきらに尋ねた。あきらはあたりを見回した。

「本当だ。今日もいないね。ただの風邪ってきいてたけど・・・なんかあったの？」

リナは今日で10日休んだことになる。

「いや・・・俺も風邪ってきているから。わかんない。」
「お前見舞いくらいいけよ。彼女がさみしがってるぞ。」
「うるせえよ。」

その康の返答にあきらは笑って流した。教室は今日も賑やかに笑い声が飛び交う。だけど、康には何も耳に入ってこなかった。思い浮かぶりナの顔が愛おしくて、何も考えれない自分がいた。いつのまにか康にとつて、リナの存在は計り知れないほど大きいものになっていた。しかし今の康には、それが苦しめるだけだった。

学校が終わると康は急ぎ足で病院へ向かった。その帰りに、リナの家に寄ろうと思っていた。しかし一歩一歩歩くたびに足取りは重くなるばかりだった。康は踏み出す足がリナとの終りに向かっている気がしてならなかった。

病院につくと康は受付へと足を運んだ。しかし、康の足は突然歩くのをやめた。

「優介さん？」

久々に見るが、昔から顔なじみな彼を見間違えるはずもなく、それは優介こと、リナの父親だった。康の父親と同世代にあつて彼らは昔からの親友だった。しかし、優介は康に気付かずにスタスタと診察室へ足を運んで行った。康は何かあつたのかと、興味本位で彼の入った部屋のドアをゆっくりと少しだけあけてのぞいた。

隙間からのぞくと、そこには優介だけではなく、何故かりナの姿があつた。少しやせただろうか？そんなリナの背中を康は、愛おしそうに見つめた。

「先生、言ってください。もう私たちはわかつてるんです。」

強気にいったつもりのリナだったが、どこか弱気に発した声に医師はまっすぐ彼女を見ていった。

「あと・・・長くて3年ですね。」
「3年!？」

いつも冷静な優介からはかんがえられない程大きな声が出た。隣に座るリナは顔色ひとつ変えずにきいていた。

「彼女はもともと体の弱い方というのもあって・・・残念ですが・・・。」

「・・・そんな。3年って・・・この子まだ17歳ですよ?」

力なく優介は言った。そんな優介にリナはそつと肩手をやった。

「お父さん。私大丈夫だから。それに3年もあるじゃない。3年もあれば私・・・十分だよ。」

そう言っつてリナは優しく微笑んだ。そんなリナに優介は言い知れぬ切なさや悔しさがこみあげて大粒の涙をこぼした。

「・・・そんな。」

康の耳に入る皮肉すぎる会話を彼は受け入れられなかった。康は走りだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4084c/>

-DAYS-

2010年12月2日15時19分発行